

農産物・食品の市場と流通

「食」と「農」のギャップを埋める新しい価値や価値観の提案、
供給連鎖の画一化から価値連鎖の多様化へのシフト

だい ようしんし
講師 戴 容秦思 (食品流通研究室)

E-mail jessy.dai@setsunan.ac.jp

キーワード 災害時・非常時の食品流通 責任ある生産と流通
地域との共存共栄 バリューチェーン構築



研究概要

背景

- 食料自給率が低下した今日、「農」から「食」までの空間的・時間的・社会的距離が拡大してきており、両者を取り結ぶ流通も広域化してきています。
- しかし、このような食料流通システムは、災害や異常天候の連続的発生ならびに世界規模のCOVID-19の勃発により、国内ないし地域内での局地的な食料供給機能がうまく果たすことができず、非常時や緊急時における脆弱性が表れています。
- 一方、近年、農村部では異品目・異業種間の連携、都市部では都市農業などの取組みがみられ、Eコマースによる生産者と消費者間の直接取引も増えています。このため、国内ないしは地域内における食と農に関わるビジネスの多様化と連携の実質化が一層求められています。

目的

- 「ポストコロナ」や「Withコロナ」と言われるこの時代における新たなライフスタイルの形成に伴う食料の需要動向と消費行動の変容を明らかにします。
- 災害時・非常時に浮き彫りになってきた既存の食料流通システムの問題点を整理し、安定供給のための課題を抽出します。
- 抽出した課題に対して、新しく取り組まれている様々なアグリビジネスやフードビジネスの動きがどのように対応しているのか、どれくらい対応できているのか、検証します。
- 品目による商品特性の相違をふまえ、持続性・安定性・柔軟性を兼ね備えたフードサプライチェーン構築の条件を見出し、提案します。

主な成果

- パンデミック発生により国境を越えたヒト・モノ・カネの移動が停滞し、外需への食品供給が難航しました。一方、拡大する内需への対応も充分であったとは言い難いです。食品の生産・流通戦略の重心が外需向けへ移行したことにより、非常時や緊急時における内需に対応できる体制が実に弱体化しました。
- また、小売等川下主導型流通の結果の一つとして現れる過剰な量・品目数・サービス等の供給と食品ロスがみられる一方、買い物難民や子ども食堂の食材不足など、需給のアンバランスがより浮き彫りとなりました。フードサプライチェーンにおける主体間のパワーバランスの是正と、川中・川上の取引力強化と連携の実質化が求められています。
- COVID-19の影響が長期化する中で、今後の災害等発生の可能性を鑑みると、地域単位の内需向けの供給体制を強化することが喫緊の課題です。



連携の展望・産業界へのアピールポイント

地域内における農林水産業の生産者、加工業者、流通業者、食品産業、行政機関、消費者の意志疎通と共存共栄的連携をベースとした、新たな価値を見出すアグリ・フードビジネスについて提案します。

戴の研究について
もっと詳しく👉

